

風倒木の銘木市出品

岐阜大学応用生物科学部附属岐阜フィールド科学教育研究センター 石田 仁

岐阜大学の位山演習林 (550ha)には温帯落葉広葉樹林に多くヒノキ科の針葉樹(ヒノキ, スアナロ, サワラ)が混交, もしくは一部純林化した大径木天然林が 200ha 近くあります。今日天然ヒノキの生態を観察できる希少な森林です。

近年, 本州直撃コースの台風が頻発するようになってきましたが, 当演習林でも今年の台風によって風倒木害が多発しました。林道沿いの天然林大径木については, 支障木の処理作業もかねて一部搬出し薪材や造作材として利用し, 特に形質の優れていたヒノキ(約 250 年, 胸高直径 80cm 元玉 7m 材, 2.2 m³)とウダイカンバ(胸高直径 70cm, 元玉 2m 割れ・腐り 0.6 m³, 二番 2m 腐り 0.6 m³, 三番 5.4m 1.35 m³), それぞれ 1 本を造材し岐阜の銘木市に出品しました(写真)。2018 年 11 月 15 日の木材市で, ヒノキ 55 万円/m³, ウダイカンバ元 2 千円/本, 二番 5 万円/m³, 三番 33 万円/m³の値が付き 150 万円程度の収入となりました。位山演習林では, 拡大造林時代, 悪くいってしまえば略奪的に天然林から天然木を収穫して収入を得てきました。天然林の伐採跡地に植林された針葉樹人工林も 200ha 近くありますが, 現時点では若齢, 手入れが必要な時に職員の人員減があり保育が十分にできなかったというようなこともあり, 主たる収入源となるには至っていません。これまでの収入源は主に天然木の販売によって来たといえます。大学が法人化されて以来, 演習林は農場と統合しフィールドセンターとなりましたが, 近年より一層収益を求められる傾向が強まっています。現在も天然林大径木は貴重な収入源となっています。それは, それで助かりますが, 天然木の価値が高い反面, 収入源として期待され, 再び伐採量が増えていく心配もないわけではありません。学術的にも貴重な森林であり, 本格的な伐採が始まればたちどころに消失してしまうことも, 十分に理解しておく必要があります。

位山演習林では, 岩礫地以外では, ササが密生しており, 腐朽しコケむした倒木上はヒノキ等の実生稚樹の更新場所となっています。大径木林では, 木の密度が低く, 林の中が明るいこともあって, ササが地表を密に覆い将来の森を形成する稚樹がほとんど生育していません。森林の更新を配慮せず大径木を抜き切りしていけば, ササ原になってしまう可能性もあります。樹齢数百年の樹木の木材は, 伝統建築の用材等として今後も必要とされていくはずですが, 倒木の搬出も, 森林の更新を配慮し, ササの除去と表層土を裸出し稚樹の定着と成長を促進する試み(かきおこし)が必要と考えます。

